

GVHDの予防法開発

安全な骨髄移植の実現か

本学の渋谷彰教授(シス医)、渋谷和子准教授(同)、鍋倉幸研究員(医学)らの研究グループは、骨髄移植に伴う合併症である急性移植片対宿主病(GVHD)の発症の原因となる物質を発見し、GVHDの予防法・治療法を開発したと先月19日発表した。今後、より安全な骨髄移植の実現や、骨髄ドナー不足の解消に役立つと期待されている。

GVHDは白血病治療な

どのために骨髄移植した人の3分の2が発症する合併症。皮膚や消化器、肝臓などに障害を起し、死に至る場合もある。

研究グループでは、Tリンパ球と呼ばれる免疫細胞の表面に存在するDNAM1-1に注目し、マウスを使った実験でGVHDの発症に関係していることを確かめた。また、DNAM1-1の働きを抑える抗体を与えたマウスでは、GVHD

が予防された。また、すでに発症したマウスにDNAM1-1の働きを抑える抗体を与えると、症状が大きく改善することも確かめた。

◆DNAM1

1996年に渋谷教授らによって発見されたたんぱく質。リンパ球など免疫細胞の表面に存在し、がん細胞を攻撃するときに重要な役割を果たす。GVHDは、ドナーから移植された骨髄で作られたリンパ球などが、患者の臓器を異物と見なして攻撃することによって発症する。